

『オモチャになりたい』

著：崎谷はるひ

ill：明神 翼

「……石原先生？」

怪訝そうな杜和の声に気がつく、世都はホットワインを飲みながらぼろぼろと泣いていた。あたたかく甘い飲み物に緊張がほどけ、押しこめていた感情が溢れてしまうのがわかった。

「ど……して、ですか？」

「なにが」

「なんで、ほっとしてくれなかったんですか？」

なじむような声を発するべきではないことも、理性ではわかっていた。けれど、あたためたアルコールは案外と酔いをもたらしたようで、頭と心が乖(かい)離(り)したまま世都は言葉を止められない。

「俺のことばかだと思ってるんでしょう？ あんなのに目をつけられて、襲われて」

「否定はしませんね」

自虐的なそれを、杜和はひどいことにあっさりと肯定した。ますますかっとなって、もう八割方飲みきったカップを、世都はテーブルに叩きつける。

「じゃあほっとけばいいじゃないですか。なんで親切にしたりするんですか、困ります！」

「なにがどう困るんですか」

世都が激昂しようとまくし立てようと、杜和は冷静なままだった。それがよけい腹立たしく、ぐすぐすと涙をすすって世都はついに言った。

「俺は、千澤口先生が好きなんです！」

叫ぶような、挑むようなそれは、世都にとってやけくその発言でしかなかった。

もうとにかく言うだけ言ったら、この部屋を出て行って家に帰ろうと思った。仕事も辞めたってかまわないし、どうだってよかった。

「そっちはぜんぜん覚えてないだろうけど。俺はずっとずっと、高校のときから好きだったんだ！ それなのになんの興味もない顔して、でも親切にされたら困るじゃないか！」

もう縁がなくなるならいっそ——という勢いで本音を暴露する。だがやはり杜和は動じた様子もなく、こちらはコーヒーを啜りながら、あっさりと言った。

「だから、それでなにがどう困るんだか、わかりませんが。あんたが俺を好きで、それが？」

「……っもう、いいです……っ」

関係ないだろうと言わんばかりの態度に、世都は目元を歪めて呻(うめ)いた。最悪だ。なんでこんな無神経な男、好きになったりしたんだろう。

ぐいと濡れた目元をこすって、世都は立ちあがる。とたん、杜和の冷ややかな声があった。

「どこ行く気ですか」

「帰るんですっ」

「ばか言っていないで、それ最後まで飲みなさいよ」

歩き出すと、腕を取られる。呆れたように吐息混じりの声を発せられ、世都はどうしてと唇を噛んだ。

「なんでほっといてくれないんですか……っ」

「あんたこそ、なんでそうキレるんですか。さっきのばか男が部屋で待ってたらどうするの」

「それでも、ここにいるよりマシですっ」

「どこがマシ」

どこまでも冷静な杜和が憎らしい。涙目で睨みつけて、世都は声をうわずらせた。「好きだって言ったって無視されて、俺は、どんな顔してりゃいいんですか。軽蔑されてるのもばかにされてるのもわかってるけど、それで平然となんかしてらんない……！」

相手にもされないことを、これ以上思い知らされたくない。その程度のことさえ許されないのかと悲痛な声をあげた世都に、杜和はまたため息をつく。

「ばかにはしたかもしれないけど、べつに軽蔑はしてません。ただ、なにが困るのか訊いてるだけなのに、なんでそう興奮するんです。少し落ち着いたら？」

微妙にひどいことを言いながら、世都の頬に手が添えられた。びくっと震えて世都があとじさろうとすると、肩を掴んで引き寄せられる。

「俺がやさしくするのはなんで困るのか、説明してくださいよ」

「だって……そんなこと、されたら」

「されたら？」

そんなことをされたら、期待しそうになる。見こみなどなにもないのに、許されて、受け入れられたのかと都合よく思いたくなる。けれど杜和の言葉はどこまでも冷たく、どっちを本当だと思えばいいのか世都にはわからない。

だが、まるで唆(そそのか)すように、身長差のある背を屈め、眼鏡をはずした杜和は目を覗きこんでくる。

「言葉で言えばいいだろう。あんたが考えてることは、言ってくれなきゃわからない」

声が甘い気がした。これで誤解するなど言われても、腰を抱くように支える大きな手のひらや、まっすぐ絡みあう視線にのぼせあがる世都には無理な話だ。

(言う。言うってなにを。なにが、どうして)

顔が近づく。眼鏡のない顔はあのかの杜和となにも変わらないような印象で、頬に触れた吐息が甘くあたたかい。

「どうしたいの。俺にどうしてほしい。言いなさいよ——石原先輩？」

ぞくつとするような声で言われたとたん、すべてが吹っ飛んだ。世都の心はあの、高校のころの美術室まで一瞬で逆戻りし、彼を思い焦がれて死にそうだった夏が蘇る。

頭に血がのぼり、杜和のことしか見えなくなった世都は、結局はこのひとことしか紡げない。

「す……好き」

素直になったのは、どうせこれ以上の恥もないと思ったからだ。

(そうだよ。どうせ仕事も辞めて、もう二度と会わなければいいんだから)

とんでもない目に遭わされた恐怖と、そこを助けられたという安堵と脱力からか、世

都の頭は興奮状態のまま、理性的な判断などなにもつけられない。

そして、封じこめていた恋心を決死の思いで口にした世都に対し、杜和の表情も声も——なにも、変わらなかった。

「ふうん。それで？」

てっきり、もっと冷ややかに拒絶されるのだと思いこんでいた。だが拍子抜けするほどあっさり杜和は言葉を受けとめ、どこかおもしろそうに笑っている。世都は戸惑いながら、目線と言葉でさきを促している様子の彼をまじまじと見つめた。

(いやじゃないのか。軽蔑してないって言われた。どうしてほしいのか言えって)

だったらもう、求めるだけ求めてもいいのだろうか。だめだ、やめろとかすかに残る理性が叫ぶのに、世都の胸は期待に膨らむ。

(もうちょっと、あと、ちょっと)

薄い形のいい唇が目の前にある。かすかに笑うような形のそれに触れたくて触れたくて、世都はこくりと息を呑む。あと数センチで届きそうなのに、届かない。もうあと少し杜和が屈んでくれればいいのに。

「……ス」

キスしたい。声にならないまま唇を動かすと、杜和はゆっくりと目を細めた。欲しいなら奪えという意味なのだと、なぜかそれだけは鈍い世都にもわかった。

「好き、だから、キス……」

爪先に少し力を入れて、上を向く。杜和は逃げないまま、おそろしくぎこちないだけの世都のキスを、受け入れる。ふわり、と唇にやわらかなものが触れて、びくりと逃げようとしたら杜和がそこを軽く吸った。

「ん、ん……っ」

唇を吸われた。薄い皮膚をかするなまなましい感触。杜和からの、ささやかであれ能動的なアクションを受けて、世都の理性が完全に吹っ飛び、彼の首筋に縋りついてしまった。

「ねえ、好き。好きなんだ。ずっとずっと、好きだったんだ」

すき、すき、とせつない声で繰り返して、一生触れることなどできないと思っていた、杜和の薄い唇に触れた。

「助けてくれたの、かっこよかった。ホントに嬉しかったんだ」

ほんとに格好良かった。胸が痺れて、この男が好きで好きで、もう自分はどうかになるというくらいに心が騒いでたまらなかった。

「今日はもっと、好きになった。だから、……だから、無視しないで。やさしくだけしないで」

「——それはどうも。じゃあ、俺はほかになにをすればいいですか」

泣きそうになりながらしがみつき、ただ触れるだけのキスを繰り返しては、いつ突き飛ばされ、拒まれるだろうと世都は怯えていた。だが杜和は、ぎこちないだけのそれにやさしく応え、両手で腰を抱いて顔を傾け、世都の唇を自分のそれでくすぐるように撫でてくれる。

「キスだけでいい？ ほかにしたいことは……？」

思わせぶりにするばかりで、しっかりと抱きしめてはくれない。もどかしいと世都は口を開き、もう恥など知らない、本心を告げた。

「お願い、お願いだから、だ……抱いてください」

「抱く？ いま抱いてるじゃないですか」

そうじゃないと世都は唇に吸いついて、もうこれ以上ないというストレートな言葉で告げた。

「せ、セックスがしたい……」

「大胆ですね」

のちのち考えると、なんとも寒い台詞で誘ったものだ。だが、嫌われたら死ぬといった勢いで泣いて、杜和はしょうがないなとため息をついて、抱き返してくれた。

「男、やったことないんだけどね。してあげてもいいですよ。……あんた、ばかだけど、かわいいから」

本文 p105～112 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>